

今月の谷口雅春先生のお言葉

# 家庭が幸福で愉快になるために

家庭の食事が楽しい寛ぎの場となるとき

一日の勤労を終わって、外から家庭へ帰って来るとき、或は店を看まもる時間が終わって本当にホームというものに吾々が落着くとき、そこは実際吾々にとって、天国でなければならぬのである。そこで吾々が楽しい晩餐に對うとき、吾らの前には、愛する家族たちの楽しい顔が並んでいる。吾らは互に愛情の籠った微笑をえみ交わしつつ、その日にありしナンセンスを語るであろう。この時、すべての窮屈さはとれてしまい、寛ろぎと、自由さと、愛の言葉と、栄養を与えてくれる食物とが終日

の吾々の労苦をなぐさめ癒してくれるのである。かくのごとく本当の善き家庭は実に天国であるのである。

（新編『生命の實相』第13巻155～156頁）

食卓で不快な心を起こせば、家庭が暗くなる

私の知っている或る家庭地獄では、事務所から良人が帰って来て、家族打ち揃って晩餐の食卓に向うとき、そこが小言の審問所になるのである。良人は事務所の色々の多忙な世間的な心遣いで神経が疲れていて、ちょっとしたことにもイライラしたくなっている。予想に反したお菜が食膳に並んでいると、最初は何の気もなくそ

れを不味いと小言を言う「何故こんなお菓をこしらえた？」と言つて咎める。この時、細君は細君で折角の心尽くしに小言を言われて引合つたものではないというので不快な顔をするであろう。妻の不快な顔を見ていると良人の方では益々不快になつて来る。「終日、勤め先で勞苦して、さて慰められようとして歸つて来たのにお前はそんな膨れ面をして私を迎えるのか」と言いたくなる。或はそれを言葉に出すか、言葉に出さなくともその思いが顔にあらわれる。互の不快が互の心と顔とに相反映して、面白くない家庭の空気はいよいよ益々険悪になつて来る。

(新編『生命の實相』第13卷158〜159頁)

## 家庭の中で自制を

失つてもよいと思つるのは間違ひ

何故吾らは最も平和な慰めの聖所でなければならぬ家庭の中に於てだけは、自制の徳を失つて、ちよつとしたことにも怒りを爆發さし、ちよつとしたことにも露骨に不快な顔を見せて、最も神聖な家庭の平和を汚してしま

うことを惜しまないのであるうか。

すべてこれらのことは魂の弛みから来るのである。家庭に於ては感情を掻き乱した態度を見せても、イライラしく振舞つても、口ぎたなく罵つても、自分の社会的地位が危くない。臧首(編註)・雇い主が使用人を解雇すること)される心配もないし、逐い出される心配もないし、そのために生活に困ることもないと思つて多寡を括つているので、ニセ物の自分が安心してのさばり出すのである。しかし家庭に於てイライラしく振舞つたり、口ぎたなく怒鳴りつけても、そのために生活に困ることはないと思つるのは大なる考え違いである。もし本當の吾らの楽しい生活の大部分が家庭にありとするならば、その家庭の空気を憂鬱なものにしてしまうことは、自分自身の楽しい生活の大部分を殺してしまうことになるのである。諸君はもしこれまでに昂奮して家庭の人々に口ぎたなく罵つた経験があるならば、罵ることによつて、決して自分の心が幸福にも愉快にもならぬものであることを実験していられるに相違ないのである。

(新編『生命の實相』第13卷161〜162頁)

## 愛の心を現し出すとき家族が善くなる

息子や娘を善くしてやりたい愛の心だといって、始終大きな声で口穢く罵ることは失敗である。それはたとい愛の心があっても、鬼の面を被った愛の心である。鬼の面を被っている以上は、愛でも相手を恐れさすほかに能力がないのである。汝の鬼の面をとれよ。そして本物の愛の顔を出させよ。相手は懐いて、愛に感じて、喜んで善に遷ってくれるのである。

たえず小言を言い、絶えず怒りを振り撒いて歩き、間断なく人の欠点をさがしつつ、その人を善き人にしてやろうと思うのは、「不調和」から「調和」が生れ出て来るだろうと予想すると同様な迷信である。たとい、この世の中に瓢箪から駒が生れ出ようとも、「不調和」から「調和」が生れて来ることは難しいのである。諸君がもし諸君の立ち対う人たちをば善ならしめようと欲するならば、自分自身が先ず調和した心持にならなければならぬのである。自分の心が乱れ、痲癩に触って相

手を鋭い言葉で刺し貫いているようなことで、相手を善に化し得るなどと偉そうなことを考えぬが好いのである。

家庭の中でブツクサ小言を言うものは、ただその家庭に黒雲を投げ込んで、明るい光線を押し消し、澄んだ生々とした空気を、濁った泥水のような空気にしてしまふほかに何の能もないのである。暗い中で育つものは黴ばかりだ。家庭の空気を暗く冷たくしておきながら、美しい薔薇や牡丹の花のような美德を咲かせようと思ってもそれは無効だ。(中略)

すべてあなたの家庭にてつかわれる言葉をば「神の子」らしい洗練されたものたらしめよ。互を尊べ。何故なら、あなた達は皆な「神の子」であり、「神の子」の生活を成就するために家庭を造っていられるのである。(新編『生命の實相』第13巻168〜171頁)

